

●草野心平

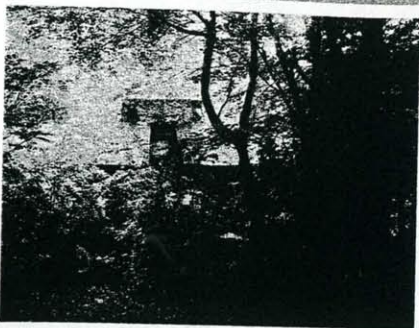
テレビは朝から夜中まで原発事故を追う、新聞は来る日も来る日も洪水のように原発事故を伝えている。津波の方は復興が進み、釜石でも宮古でも気仙沼でも明るいニュースが目立つようになった。しかし、福島県には一向に明るいニュースはなかった。

原発事故という、いつもマスコミに登場するのは大熊町であり、富岡町であり、浪江町だった。全村が避難したにもかかわらず、あまりテレビや新聞に姿を見せない村があった。

川内村である。6月に入ったある日、私は川内村に向かった。

何年前になるだろうか、私は、この村で開かれていた天山祭りに、何度か出かけたことがあった。

祭りの中心にいたのが、草野心平というとても大きく大きな詩人であった。心平は隣の上小川村、現在のいわき市小川町に生まれ、中国で青春時代を過ごした宇宙人ともい



林に囲まれた天山文庫

こうした特殊な情報ルートを持たない人は、さほどの危機意識がなかった。

知らぬが仏である。

ただ1つの情報手段はテレビだった。郡山市は電気が通じていたが水は出ない。電話もよからずかからない。ガソリンが切れたので、出歩くこともままならなかった。

テレビから流れる枝野官房長官のコメントや専門家の説明は、さほど切羽詰まったものではなく、現場から寄せられる情報とは著しく異なっ

るも地獄 日々

作家 星亮一

うべき人で、文化勲章受章という雲の上の人だった。

しかし人柄はいたって優しく、そこがたまらない魅力だった。

天山とは中央アジアを越えて、東洋と西洋を結ぶ「シルクロード」にそびえる天山山脈のことであり、心平の蔵書をおさめた天山文庫もあつた。

天山祭りは、みちのくと中央の交

流、人と人との出会いを大切にしたいという熱意を込めて、心平がひらいたものだった。

心平は高齢であったが、天山文庫の中心にでんと座り、東京から大勢の門下生が来て、村人と一緒に「どぶろく」を酌み交わすのだった。いつのころか川内村では心平に名誉村民の称号を贈り、宝物のように心平をいたわった。

心平没後も毎年夏に祭りが開かれていたが、今年には原発事故で開かれるはずもなかった。

私が最初に向かったのが天山文庫だった。

文庫は高台にあり、村が一望に見渡せた。



天山祭りでの草野心平さん

村の風景は昔と変わらないのだが、村人の姿は静まり返っていた。人影のない天山文庫は寂しげだった。

●運命の3・11

あの凄い地震は川内村にも衝撃を与えた。村からは300人ほどの人が東電の福島第一原子力発電所で働いており、第一原発が地震と津波で全電源を喪失、コントロール不能に陥ったことは、すぐさま村に知らされた。

「すぐ逃げろ」

非番で村に残っていた人たちは、同僚からのメールに仰天した。

コントロール不能とは原子炉の爆発を意味した。何人もの家族が車で満タンガソリンを入れて、多くは新潟方面に向かった。

東京に向かった人もいた。福島市や郡山市に住む私の知人も3人、避難したが、あとで聞くと、そのうち2人は原発の関連会社からの情報によるものだった。

ていた。

川内村役場に富岡町長から急報が入ったのが12日早朝である。

「町民6000人を川内村に避難させたい」というものだった。

「えっ」

遠藤雄幸村長は声を詰まらせた。川内村の人口は3000人である。

そこに6000人が避難してくるのだ。どこに宿泊してもらうか、食糧はどうするか、大混乱に陥った。

富岡町の人口は1万5000人余である。約6割は自主的に各地に避難していた。

降ってわいた突然の緊急事態である。

役場あげて対応策をとり、村内の小中学校の体育館や講堂を宿舍に決めた。

12日午後、曲がりくねった道路を10台ほどのバスが富岡の人々を乗せて、続々とやってきた。続いて何百台というマイカーもやってきた。

村始まって以来の渋滞であった。重大なことが次々に起こった。電話が通じなくなった。携帯電話も怪し

くなくなった。

日本という国がこれほど脆弱かと遠藤村長は頭を抱えた。

政府からも県庁からも何ら連絡がない。遠藤村長は限られた情報をもとに、どう行動すべきか判断に迫られた。

●決め手は水素爆発

そのさなかの12日午後3時36分、1号機で水素爆発が起こった。かつての私の職場である福島中央テレビ

さまざまな想いを語る遠藤村長。ビッグバレットぶくしまにて

